



**カミキリムシと菩提樹
(後編)**

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺 信夫

6. カミキリムシの正体

ところで、菩提樹を枯れ死させたカミキリムシ(英名: Longhorn beetle)とはどんな昆虫なのか。

よく知られているのは、シークァーサー(ヒラミレモン)などの柑橘類の被害である。みかん農家の害虫対策で最も気を使うのがこのカミキリムシの食害で、成虫は梅雨時によく見かける(写真8)。しかし、ガジュマルと同じ「クワ科の植物」である菩提樹にカミキリムシの食害があるとは考えもしなかった。なぜなら、ガジュマルは台風で根元から倒れることはあっても、カミキリムシの被害で枯れたということは聞いたことがなかったからである。

みかんの場合、カミキリムシが産卵し、幼虫が幹に侵入すると、侵入口に小さな穴が開き、その穴からオガクズ状の白い糞が排出される。カミキリムシの幼虫は樹に入ると、樹の組織を食べながらトンネルを掘り、生長する。このためトンネル部の樹皮は少し膨らみ、剪定鋏の先や針金でこすると、容易に樹皮がはげ、樹皮下に白いイモムシ状の幼虫を発見することができる。樹根に近い幹を観察することで、被害に気付くことが多い。

しかし、菩提樹の場合は樹皮が厚く、オガクズ状の糞の排出はなく、幹や枝が枯れるまで、被害に気付かない。傷んだ枝や幹の樹皮をはがして、樹皮下に幼虫を発見してはじめてその被害に気付く。その時はすでに手遅れである。オガクズ状の糞は茶色に変色し、樹皮と木質部との間にたまっている。

ゴマダラカミキリの幼虫の期間は2年といわれている。今回発見された幼虫は数ミリから数

センチまでの大きさがあり、2010年から2011年にかけて、複数回にわたって産卵したことがわかる。カミキリムシの被害を最小限にするには、防虫剤の散布のほか、肥培管理を徹底し、樹勢を強くすることである。すなわち、万一幼虫が幹に穴を開けて進入しても、樹勢が強いとヤニなどで甲虫類の幼虫は生育できないといわれ、また成虫は樹勢が衰えた幹に産卵する傾向があるので、肥培管理に気をつけて樹勢を強くすることが予防につながるといわれているからだ(Wikipedia)。

7. 枯れ死の原因と今後の対策

結論として、菩提樹苑の菩提樹はこの2年間台風時にもネットを張らず、肥料も与えなかった。菩提樹は度重なる台風で傷めつけられ、その後も自然の成り行きにまかせたことで樹勢が衰え、カミキリムシの食害を防ぐことができなかったのである。

3本の菩提樹のうち2本が枯れてしまったので、母木から非常用に取り木で育てていた樹齢4~5年の菩提樹を2012年2月16日と3月18日に移植し、かろうじて枯れ死をまぬがれた残り1本の菩提樹は枯れた先端部分を切り除くことで対応した。

菩提樹が枯れた原因から次の対策をとることにした。

- ①台風時の強風と塩害を防ぐため御影石の塀を2mから4mにかさ上げし(写真8)、それに加え、台風時には上部に更にネットを張る



写真8. ゴマダラカミキリの成虫、浦添市牧港の自宅庭で(2012年6月10日撮影)

ことで対応する。折れた「オオバアカテツ」の防風林のかわりに「フクギ」を植樹する。

- ②肥料を与えないのではなく、肥培管理で樹勢を強くし、万一、カミキリムシが産卵し、幼虫が樹に侵入しても、その後の成長を極力阻止する。
- ③カミキリムシ対策として、樹根に近い幹にネットを張り、少なくとも、樹根部分の産卵・食害を防止する。薬剤は幼虫にはほとんど効果がないことがわかった。
- ④インドボダイジュは沖縄在来の樹木ではなく、県内に移入されてから年月が経たない。そのため、本当の意味でのボダイジュの専門家は沖縄にはいない。インドのスメダ師は「自然のなりゆきにまかせたほうがいい。菩提樹は祈りと線香の煙で育つ」と言っていたが、沖縄は台風のないインドと風土や生育環境が異なるため、沖縄の風土・環境にあわせた樹木管理をしなければならない。
- ⑤スリランカのスマナサーラ師は「むやみに枝を切るのはよくないことだが、樹を守るため剪定するのはやむをえない」と言っていた。
- ⑥植物専門家や自称専門家と称する人の意見を鵜呑みにせず、日頃から樹を観察し、管理している自分の経験を優先する。

新たに移植した菩提樹は新芽を出し、枝も張り出してきている。枯れ死をまぬがれた菩提樹も芽を吹き出した。数年もたつと以前のように樹も大きく育っていることだろう。

8. おわりに

以上が菩提樹枯れ死騒動の顛末である。

この機会に、あらたにかさ上げした菩提樹苑の4mの塀にかこまれた構内に、自宅で作っていた沙羅双樹と無憂樹（アショカ）の樹を移植した。沙羅双樹は沖縄海洋博記念公園・熱帯ドリームセンターにもない。仏教三大聖樹が一箇所に植樹されているのは、県内では沖縄菩提樹苑だけである。ドライブの際に、菩提樹苑を訪問し、樹の成長を観察することを希望します。

追記：一時枯れ死をまぬがれていた、1本の菩提樹も2012年9月29日に襲来した強烈な台風17号によって著しいダメージを受けたため、11月4日に掘り起こし、新たに取り木苗を移植した。11月11日に、ダライ・ラマ法王14世が菩提樹苑を訪問する予定である。（沖縄菩提樹協会会長）。

参考文献

1. 長嶺信夫：古文書にみる「聖なる菩提樹」の歴史、沖縄県医師会報 2008年2～3月号
2. 玄奘著 水谷真成訳注：大唐西域記、第8巻、平凡社、1999年
3. カミキリムシ <http://ja.wikipedia.org/wiki/カミキリムシ>
4. カミキリムシ <http://www.sc-engei.co.jp/navi/gaithu08.html>



写真9. 塀をかさ上げた菩提樹苑。菩提樹を贈呈したスメダ尊師とともに（2012年5月13日撮影）



妻の実家での夏休み

浦添総合病院外科
長嶺 義哲

子どもたちも大学生～中学生になると部活やら夏期講習やらで、昔のように一家そろって旅行になんてことがなかなか計画出来なくなってきた。そこで手っ取り早い夏季休暇の過ごし方として妻の実家（福島県只見町）で過ごした夏休みをご紹介させていただくことにする。妻（元看護師）との成り染めは、小生が大学病院勤務から、福島県会津若松市の病院へ転職した時から始まり彼女はここの看護師をしていた。

これと言った歓楽街もなく冬になるとスキー場がオープン、レジャーの中心がスキーとなる。同僚や看護師さんMRさんたちとナイタースキーに行くのが定番で、入職当初スキーなんて経験したこともなく、何とかなるからと同僚の甘い言葉に誘われて行ってはみたものの、一通り教えてくれて自分に付き合ってくれたが、しばらくするといなくなり困っていたところ、救いの神はいるもので、個人レッスンで教えてくれるMRさんがいた。彼はスキーの選手だったとのことで、小生のすべりを見ながら後ろ向きで滑ることが出来るほどの技術を持っていて、親身になって根気強くよく教えてくれた。

おかげでナイタースキーも人並みに楽しめるようになり、乗り損ねてリフトを止めることも激減。さてその行き帰りの車への分乗割り振りの偶然が妻と出会いの始まりとなった彼女は他病棟の看護師で顔は知ってても話したことはあまりなかったのだが、グループ交際をつづけるうちにそういうことになっていった。

彼女には兄、姉がおり二人はすでに東京で家庭を持っている。彼女が地元に残ってくれるものと両親はたぶん期待していたと思うが東京よりもさらに遠い沖縄に嫁ぐと知って複雑な心境

だったと思う。

それは「ブラジルに行くわけでもなくまだ沖縄だからね」と言う義父の一言からも複雑な胸のうちの伺い知ることが出来る。

そういった負い目もあり妻と子どもたちは出来るだけ毎年帰省させ、小生も数年に一回ではあるが休みを取って一緒に帰省するようにしている。

羽田から京急電車で乗り換えなしで都営浅草駅下車。東武浅草駅から鬼怒川温泉駅へ、そこで野岩鉄道に乗り換え会津田島駅下車、そこでレンタカーを借り妻の実家まで一時間半でやっ

と到着。那覇空港からなんと9時間の長旅だ。浅草からの東武鉄道は景色もよく快適で子どもたちもトランプをしたり写真を撮ったりで気に入っている様子。車窓からは浅草の町並みが次第に広大な田畑へと変わっていき、山に入るとのんびり森林鉄道の雰囲気が味わえなかなかの癒しを味わえる。

会津田島駅周囲は大きなショッピングセンターもあり、そこで買い物をしてからレンタカーで帰る。途中は田舎の一本道で山と川と田畑で農家が散在。のんびりドライブを楽しめドライブ好きの自分としては、いつもは通勤での運転がほとんどで、もっと走りたいとの欲求不満があったが、この欲求も十分満足させてくれる。

やっとのことで妻の実家へたどり着くころは、日も暮れて（山間部で日没が早い）まず旅の疲れを取るため近くの村民温泉「むら湯」へ行く。

そこは泥色をした温泉で泥臭いのだが、肌がキュキュっとすべすべになり身体もあつたまりここに来るときの楽しみの一つとなっている。

待ちに待った夕食は裏の畑で取れたてのきゅうり、トマト、漬物などでこの環境のせいか新鮮な野菜のためかもしれないが、とてもおいしく感じられ食も進む。

沖縄では肉なしの食事なんて考えられないが、ここではなぜか満足感がある。

夜は早く9時過ぎには車もほとんど通らなくなり、虫の音や蛙の大合唱が聞こえてくる。

さすがにこの時間には寝られないため、子どもたちと真っ暗な田んぼ道を懐中電灯の明かりを頼りに散歩に出る。蛍が淡い緑色の光を放って飛びまわっている。以前に比べれば激減しているらしい。空を見上げると満天の星がみえ、目が慣れてくるに従ってさらに小さな星も天の川もはっきり見えるようになる。ipadでStar Walkというアプリが優れもので、ipadを天空にかざすと位置情報や季節、時間帯を自動で認識し星座名を図示してくれる。大自然と情報機器との癒合は意外と風情があり心地よいものを感じられた。

朝は6時に大音響の村内放送があり苦情はなさそうなので皆さん、この時間には起きてるのだろう。

朝は散歩がてら近くの山から流れる清水を汲みに行く。口当たりのまろやかな水でお茶など飲み水に使う。時には近くの農家へ生みたて卵をもらいに行く。生みたての卵の黄身は箸でもてるほどの弾力性があり濃厚な味で、贅沢な朝食となる。

早起きなので一日が長く10時ごろにはお腹がすいてくるので、とうもろこしやスイカをとってきて食べる。

車で1時間半ほど走らせると尾瀬国立公園の桧枝岐(ひのえまた)入園口があり、尾瀬の自然も満喫してきた。きれいに整備され観光地化

した自然とは違い、遊歩道を2本引いただけの出来るだけ手付かずの自然を残すように工夫されている。

高原のきれいな空気とどこをとっても絵になる景色、唱歌「夏の思い出」そのものだ。

日帰りハイキングが出来るところで折り返すのだが、なんせ道のりが長く(比地大滝遊歩道の3倍くらいの距離)行きは写真撮ったり横道を散策したりで元気に歩けるが、帰りは疲れに加え、熊出没注意報まで出て奴と出会ったときの対処法など想像もつかないままとりあえず鈴を鳴らし出会わないことを願いながらバス乗り場までたどり着いた。

また、別の日には亡き義父のお墓参りに仙台郊外の墓地まで行き、蔵王温泉で一泊して帰ってきた。その他、恩師である元上司や元同僚を尋ねて近況報告をしに行ったりもした。

そして長いようで短かった妻の実家での夏休みも終わり帰路に着いた。

仕事の日常を離れ、頭をリセットすることで回りもよく見えるようになったような気がし、このような休暇は心のビタミンとして大事なんだと感じた。

今回4人の娘のうち2人しか一緒に行けなかったが、もう難しいかもしれないが家族6人で又一緒に旅行する機会があればいいなと願っている。

